

【執筆者の紹介】

大正十一年一月一日 長野県上伊那郡美和村溝口で生

まれる

昭和十一年三月 美和尋常高等小学校を卒業

昭和十六年 美和青年学校卒業

昭和十七年九月 徴兵検査 甲種合格

昭和十八年一月十日 金沢市騎兵第五十二連隊に入営

三月 満州牡丹江省樺林第九師団騎兵第九

連隊に転属

昭和十九年十月 満州興安北省海拉爾搜索第二一九連

隊に転属

昭和二十年十月 入ソ

昭和二十三年八月 舞鶴港上陸

八月二十日 復員

昭和二十四年二月 美和村役場に就職

昭和五十一年三月三十一日 長谷村役場退職

昭和五十四年四月、平成三年 三期十二年長谷村議会

議員に就任

平成六年七月 長谷村選挙管理委員に就任

昭和六十年より全抑協長野県支部監事

(長野県 西村 又夫)

シベリア抑留者の生への執着

愛知県 森 藤 眞一郎

将校が重戦車でひき殺された

昭和二十(一九四五)年八月十五日、関東軍第八六八部隊は、軍の再編を目的に綏陽(現ソイヤン)から敵の目をくらますため溪谷を抜け牡丹江へと向かった。我々国境守備隊(約千人)は、混成部隊であるため中隊ごと各々経路を選択し行動した。

我々野戦重砲隊は馬数十頭と砲二門である。その行動途中、牡丹江街道でソ連戦車隊十数台の攻撃を受け、やむを得ず応戦し戦車三台を擱座炎上撤退させた。しかし今後の展開を考え、照準器だけ取り外し、砲は炎上爆破させ、兵、馬は溪谷に沿って山中へと転戦した。途中無惨にも邦人、兵隊が体力の限界に力尽

き、谷川に沿って倒れているのを発見するも、皆我が身がどうなるかだけが頭にあつて誰も手を差し伸べることすらできなかつた。

ところが八月二十五日、山中で休憩中、搜索機に発見され、自動小銃を持った十六七人搭乗させた重戦車に攻撃され、しかも戦車は数台と続いていた。我々の兵器といえは銃剣と手榴弾のみである。谷川沿いの兵、邦人の悲惨な姿が目には焼き付いており自ら敵弾に向かい行く者、手榴弾で自決する人も少なくなかつた。ソ連通訳は「日本は戦争に負けた、ソ連軍の捕虜になれ、命令に反する者は殺す」と大声で叫んだ。部隊長は状況を判断し次の指令を出した。「全員に告ぐ。八月十五日、天皇は戦争終結の玉音放送を行った。大日本帝国は完全に敗北した。直ちにソ連軍の指揮下に入ればすぐ帰すと言っている」と宣告した。大きなどよめきが起きた。こぶしを握り締め涙を流す者、手榴弾を持って逃げる友もいた。しかし、ほとんどの兵は、八月十五日負けたと部隊長が宣告したのだから「すぐ帰る」を信じた。

直ちに武装解除され、鉛筆、万年筆、時計等、体に着けている物はすべて取り上げられた。自動小銃の先を背中にあてがわれ「ダワイ、ダワイ（早く歩け）」とどなられ、悲壮な思いであった。

この時に起きたのが将校の虐殺である。股間に銃弾を受け、歩けなくなつた見習士官を丸太のように倒し、その上を重戦車のキャタピラーを走らせた。血は吹き出し肉塊は四方に飛散した。ソ連兵はこれ見よがしに「スコラーダモイ、スコラーダモイ、ダワイダワイ」と我々に銃口を向けた、正に地獄の行進である。何としても生き抜くんだという気力を持てたのは、祖国の土を踏み、父母に会いたい一心と、スコラーダモイ、すぐ帰すを信じたことである。皆は黙して語らずである。しかし、このスコラーダモイは、復員船に乗るまでだまされ続けた。

ソ連兵器はすべてUSAのマーク入りだった。

超過酷な重労働で六割の死者

そこはロンドコーという町である。全抑協の資料にも、自分で調べた地図にも見当たらないが、シベリア

であることは間違いない。県の調査でも、昭和二十年九月二十日、ビロビジャン收容所にいたことは確認されているが、 Rondコーに移動し、ここでの一年八カ月くらいの状況が履歴申立書から抹殺されている。しかし事実としてここで第一、第二の越冬で約千人中六百人の死者が出たことは間違いない。後世に残すためこの友の会で「 Rondコー」の真実を書かせていただくのが最後のチャンスと考えます。

厳寒の中、超過酷な重労働とは、前夜三百から五百メートルくらいの山の中腹にハッパを仕掛け二トンから五トンくらいの岩石を落とし、その大岩石を十五立方センチくらいの大きさに割り、作業場の後ろに五立方メートルの量を積み上げることです。石は家屋の塀等に塗る石灰の原石です。従って十五センチくらいに揃えないと、バランスよく焼けない。ハッパを掛けて落とされた石の上に積み上げ、作業量をごまかそうとしても検査で発見される。検査は作業終了前立ち会って、検査員が長い定規で測って体積を計算し、底に大きな石があればその日のノルマはゼロである。ハン

マーは四種類ほどあり、大きなものは、つるはしや杵より重い。また、石が小さくなるにつれハンマーを替えるわけだが、最初から石の目に沿って力強く打ち込まないと細かい砂利になる。また体力の消耗も激しい。石の目を見極めるようになるまでかなり熟練が要る。検査は厳しく、僅かな食料ではともノルマは上らない。さらに、冬期に入ると、日の昇るのが遅く日の沈むのは早い。作業時間は昼休み等を除くと正味四時間くらいである。日が短くなっても八時間労働敵守である。現場で、朝夕の暗い時間は凍死を防ぐため戦友と抱き合い足踏みをする。一生懸命作業してもノルマは二五％程度であり、一生懸命やることは死につながることもあった。現場で倒れて亡くなった人も多い。さらに、零下三十三度で風速十メートルだと体感温度はマイナス百度だと聞く。気温がマイナス三十六度になると作業に出せない事になっているが、ラーゲル長はノルマ遂行のため仕事に行かせようとする。そこで歩哨が出て来てラーゲル長と言い争いになる。その間二、三十分整列させられたまま、厳寒の中に

放っておかれる。皆は凍傷にならないよう背中を擦り合いをする。しかし結果はいつもラポーターが多い。死に直面する思いの強制労働であった。このようなことは毎日ではないが、シベリアの冬は長い、四、五ヵ月続く。何度も書きますが、生きる気力の源は彼らが唱える「スコラダモイ」を信じ、祖国の土を必ず踏むんだ、である。ラーゲルへ帰っても、話は祖国の食べ物とか帰国を信じ合う話である。

ラーゲルの環境と食糧

食糧はほとんど毎食一片のパン（二五g―三五g）と、ジュース缶に八分目くらい入った雑炊で、それも数粒の穀物が底に沈んでいるだけである。雑誌「フライデー」に苛酷なシベリアの秘蔵写真と記事が掲載されていました。その中に食事は三五〇グラムの黒パンに雑炊のようなスープ、それに鮭など少々で、みんな餓鬼のように飢えていた、とありましたが、私共とは比較になりません。鮭などともない話です。パンもスープも各班はかりで量って分け合いますが、薄暗い光の中で分配していると毛布をかぶってかすめ

ていく者も時々ある。その際は再度量り直しました。ネズミ、蛇等多くはいなかったが、それでも取り合いで貴重な蛋白源である。夏はカエルを串刺しにして焼き、雑草等を塩気なしで食べ、腹を満たしました。正に生きるも地獄、死ぬも地獄でした。ロンドコーの飢餓は知らされていない。

朝、目を覚ませば、一緒に毛布をかぶって眠った友が冷たくなっていることが続いた日もあった。亡くなった友をラーゲル内柵近くに穴を掘って皆で土葬する。凍土は石のように固い。一本のポールで交代しながら掘って約半日はかかる。作業は休日に行なうが、深さは二十五センチ程度まで掘るのが精いっぱい、体を上向きにし、皆で合掌しながら見えない程度に土をかぶせるだけである。当時の環境の中でこんな残酷な目に合うのは牡丹江で敵をやっつけた報復だろうと思う人も少なくなかった。なぜかと思う気休めもあったでしょうか。

生き抜けた思い出

列車は予想の逆方向に走る

どこをどう歩き、どこで輸送列車に乗せられたかわからないが、五十二トンの貨物車で百二十人ほど寝られるようになっており、貨車の中は中央が通路で、そこを中心に左右は三階に区切られ、一階の高さは座れる程度だ。一階の奥の左右の角に小便器が一個ずつ付いている。中は薄暗く外は何も見えない。途中各所で停車し民家等にある畳、自転車ポンプ、モーター等を貨車に積み込ませ、シベリア沿線に所構わず下ろさせる。

貨車の中で朝目が覚めたとき列車は逆方向に走っていることに皆は話が違ふと戸惑う。「すぐ帰す」はどくなつたんだ、最初にだまされた大きなショックがあった。彼らの話では「今ナホトカが満員で、復員船の来るのを待っている、しばらく他の収容所で待つだけだ」と。いづどこを走ったのかわからず、九月二十日ごろ「ビロビジャン」へ到着した。約二十日くらい貨車生活であった。牢獄以下の貨物車である。

ここでは多少の食糧があった。鉄道の枕木の交換から材木の伐採が主であった。シベリア鉄道のレール幅は余り正確でないのに驚いた。

ソ連人との対話

対話はほとんどなかった。見せない、聞かせない、教えないである。彼らに言わせると、日本人と話しているところからとなく銃弾が飛んできて命中する。「ゲーペーウ」の兵は三百メートル以内なら確実だ、銃の性能もよいからなあと言う。一つ思い出せるのは、日本の国で土地の下を走っている電車は無いだろうと自慢していた。戦友等の聞き伝えでは、ソ連労働者のほとんどは蔽罰につながる政治犯のようだった。共産党なるが故にノルマの差別待遇はないと思う。全くの人権無視であった。

目視による身体検査

二カ月に一回、作業に耐えられるかどうかの身体検査を女医が行う。これは健康診断ではなく体力の検査である。体力を一級、二級、三級に区分し、二級は八〇%で一〇〇%のパンをもらえる、三級はスパーチと

言って一カ月一〇〇%の食料でラーゲル内の軽作業をさせる。検査の前にシャワーで体を洗わせ丸裸にさせる。胸部、腰の骨の突起状態を見て判定する。私のようにやせて肋骨が突起していると三級が多く、頑丈そうな人は一級、二級であり、この人たちが多く亡くなっている。私どもは三級になっても翌月の検査ですぐまた一、二級に戻されるが次の検査でまた三級である。石鹼等はなく、風呂もなく、シャワーであかを擦るだけの衛生管理であった。

最後まで必ず帰すを信じる

昭和二十二年六月二十日、ナホトカから興安丸に乗船、本当に舞鶴に着いて祖国の土を踏めるのが疑心暗鬼であった。同時に、捕虜生活で弱くなった体力、機能が元に戻るか心配もした。ただ、不思議にも、やせ衰えた体はナホトカの給食で幾分は太った。政治的にやられたなあと思つた。

雑感

色々な事を書き、読みにくいところも多く、また御存じの内容も多々あると思います。誠に乱雑な文章で

すが悪しからず御寛容のほど……。

まだロンドンの事實は書けば書くほど悲惨な過去が浮かびあがります。平成十年十月九日、名古屋テレビで地獄のシベリア抑留二十年、ガンで散った男、山本氏の叫びを放映しました。この方の遺書の中に、ダモイは必ずできる信念を持って生きるんだと、皆にその心を説いたとありました。私もその通りだと涙をこらえ見ておりました。ダモイが完了したとき、新聞紙上はこれで戦いは終わったと書いたが、シベリア抑留者はまだ戦争は終わってないと思うとの話もあった。

八月十五日の終戦で八月二十五日捕虜になったことと、ロンドンコーで亡くなられた約六百人の戦友と共に、過酷な強制労働の償いは日本国の歴史とどんなつながりを持つのか、大きな疑問が残ります。

終わりに際して、あまりにも命を粗末にする今の世代、明日を信じ、日本の現在を支える礎となった抑留者の若き時代の生き抜いた歴史を伝えたい。

【執筆者の紹介】

大正十二年 三重県津市にて出生

昭和十六年 旧制中学校卒業

昭和十九年 関東綏陽第八六八部隊国境守備隊に配属

昭和二十年八月十五日 終戦を知らずして行動中にソ

連軍と交戦、多数の戦死者を

出す

九月 ビロビジャン收容所を経てロンド

ナーに移動

昭和二十二年六月 舞鶴港へ上陸、帰国

氏の執筆体験記を十二枚の水彩画に表現せし油絵は、当時の惨状を語るにふさわしく、三重県津市でのシベリア抑留展に展示され、好評を得ました。

なお、現在、平成十一年に結成されました勅全抑留愛知支部の役員として最大の御協力と御活躍をいただいております。

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留記

岐阜県 佐々木 博 夫

私たち三七五九部隊は、昭和二十(一九四五)年五月ごろ東安から通化に移動した。八月十五日、部隊長の命令で全員ラジオの前に集合せよとのことで、陛下の玉音放送を聞き、その後涙を流しながら詳しく話された。この後どうなることか、全員ただぼう然とした。その後兵舎の使役で日を送る。その後何日かして、ついにソ連兵により武装解除。広場に兵器は山と積まれた。部隊長の話では、我々はソ連の命によりウラジオストックから日本に帰すとのことで、吉林大学に集結することのこと。

吉林大学に来てみれば、先に来ている兵隊でいっぱいであった。何日かして切符の要らない貨車列車で着いた所は黒河であった。船で河を渡り、ソ連に入る。十月九日だったと思うが、忘れた。四十トンか五十ト